父親のワーク・ライフ・バランス観に関する研究

平澤　実穂子・齋藤正典

【研究の目的】

近年、ワーク・ライフ・バランス（以後 WLB）という言葉が社会の中で広まり、仕事と生活の両立を図ろうとする社会の取り組みもみられるようになった。例えば、内閣府ではワーク・ライフ・バランス憲章の定義をもとに、「カエル！ジャパンキャンペーン」を提唱し、仕事と生活の調和の実現に向けて取り組んでいる。ここで WLB とは、ワーク･ライフ･バランス憲章によると「国民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいても、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて多様な生き方が選択・実現できる社会」と定義されている。この定義の内容は具体的には、①就労による経済的自立が可能な社会、②健康で豊かな生活のための時間が確保できる社会、③多様な働き方・生き方が選択できる社会の 3 つに分けて考えることができる。内閣府が 2012 年 3 月に行った「仕事と生活の調和の実現に影響を与える生活環境に関する意識調査」によると、「WLB という言葉を聞いたことがある人」の割合は 55.2%であり、半数の人が WLB という言葉を聞いたことがあると答えた。また、その中でも「WLB について言葉も内容も知っている」と答えた人の割合は 20.8%で、「言葉は聞いたことがあるが、内容までは知らない」と答えた人は 34.4%であった。2008 年 8 月の調査では「言葉は知っているが内容は知らない」人は 32.4%、「言葉も内容も知っている」と答えた人は 11.3%であったことから、2008 年よりも WLB を知っている人の割合は増えたものの、まだ半数近くの人にしか認知されていないことが示されている。

また、父親の労働実態については、望月ら(2006年)の調査結果によると、労働基準法で定められている週40時間を確保している父親は、6.7%であった。週40時間を超えている父親は、93.4%ということになり、つまり1日に8時間～12時間以上にわたって仕事をする父親が9割以上いるということが示されている。父親が平日に家事をする時間については、保育園および幼稚園を利用している父親のうち、家事に関しては「ほとんどしない」、「0～30分程度」、「1時間程度」と回答した父親は93.2%であった。つまり、9割以上の父親が、家事のほとんどを母親に任せているということが示唆されている。また、父親が平日に育児にかかわる時間に関しても「ほとんどしない」、「0～30分程度」、「～1時間程度」、「～2時間程度」と回答した父親は89.1%であり、育児についても母親に任せていることが示された。さらに、家事と育児の現状について松田(2005年)は、平日の父親の家事・育児時間の平均は1.6時間、妻は5.7時間であると述べている。また、分担割合は、父親が22.5%で母親が77.5%であり、この結果は母親が働いていても専業主婦であってもほとんど変わらないことを明らかにしている。また、父親の平日の生活時間を調査した佐藤(2011年)は、父親の 1 日（24時間）の平均時間配分は、仕事が13時間、育児は1.86時間、家庭は0.66時間、余暇は1.39時間であることを明らかにしている。これらのことからも、父親の長時間労働と家事・育児にかかわる時間が極めて短いことが示されている。以上のことから、日本においては多くの父親が長時間労働をしており、その結果として家事・育児に関わる時間が極めて少ないこと、また、WLBについては、それを知っている父親の割合が増えてきてはいるものの、まだ、周知がなされていないことが明らかとなった。

そこで、本研究では、このような長時間労働を行っている父親が、自分の「仕事」、「家庭」、「子育て」、「生活」のあり方をどのように捉えているのか、つまり、どのようなWLB観を持っているのかを検討していく。そして、父親にとっての「仕事」と「生活」の調和とはどのようなものであるのかについて考察をしていきたい。

【研究方法】

1、 調査対象

研究対象は、乳児から小学4年生の子どものいる子育て中の父親とし、静岡県静岡市にあるH保育園、神奈川県相模原市にあるS小学校に通う子どもの父親397人である。回収された256名分の回答のうち（回収率：64.5%）、252人の回答を分析対象とした（有効回収率：63.5%）。父親の平均年齢は40.9歳（SD:7.0）、子どもの人数の平均は1.6人であった。

2、調査時期および実施方法

質問紙調査は、H保育園とS小学校ともに2012年11月に行った。調査の了解が得られた保育園には園長宛に直接質問紙を送付し、小学校には直接質問紙を直接持参した。保育園および小学校にて父親が無記名で質問紙に記入した後、保育園および小学校の園長、校長がそれらを回収し、返送または直接受け取りに行くことによって実施した。

3、質問紙の内容

質問紙は、仕事や子育て、家庭での過ごし方に関してどのように捉えているのかといった、父親のWLB観に関する意識を明らかにする項目（40項目）から構成されている。各項目の作成にあたっては、吉澤（2011）、大和（2008）、佐藤（2011）、樋貝（2008）などを考慮し、①仕事に対する姿勢・積極性、②子どもとの関係、③家庭での家事や余暇に対する考え、④子育て参加に対する意識の4つの枠組みを仮説的に設定した。そして、その枠組みに基づいて質問紙項目（56項目）を作成し、意味や内容が明らかに同じであると考えられる項目を整理・調整し、意味や内容が明らかに異質と見なされる項目を削除するなどして40項目からなる質問紙を作成した。質問紙の項目を【表－1】に示す。調査対象者は、教示に基づいて5件法（とてもあてはまる、あてはまる、どちらでもない、あてはまらない、全くあてはまらない）で自己評定を行い、全ての評定に対して、5点（とてもあてはまる）から1点（全く当てはまらない）が与えられた。

【結果】

1、質問紙の項目別平均値と比較検討結果

質問紙の40項目の評定値に基づいて、父親の項目別平均値を求めた。【表-1】にその結果と分散分析の結果を示す。質問紙の項目は、「とてもあてはまる（＝5点）」から「全くあてはまらない（＝1点）」の5件法による評定を行っている。従って、3よりも項目別平均値が大きいほどその項目は支持される傾向にあり、3より小さいほどその項目が不支持であるという傾向が示されていると考えられる。項目別平均値より、父親全体の結果で得点が4点以上（支持傾向の強い）の項目と2点未満（不支持傾向の強い）の項目を【表-2】にまとめた。得点が4点以上の項目は、ほとんどが子どもの存在を肯定的に捉えている内容のものであり、父親にとって子どもが極めて重要な存在となっていることが示されている。一方、2点未満の項目は、「28,育児休暇をとったことがある／あるいはとっている」、「35,子どもから解放されたい」であり、子どもは極めて重要な存在であることが改めて示されている一方で、育児休暇の取得が普及していない現状を反映した結果となっていることが示された。

また、項目別平均値について保育園および小学校を利用する父親の間に有意差が認められた項目は11項目であった。その結果を【表-3】に示す。これらの11項目は、表-3に示されているように、①保育園および小学校を利用する父親がともに支持する傾向が見られるが、保育園を利用する父親が有意に支持する項目（項目番号：5、20、21）、②保育園および小学校を利用する父親がともに支持する傾向が見られるが、小学校を利用する父親が有意に支持する項目（項目番号：14）、③保育園を利用する父親は支持しているが、小学校を利用する父親は不支持の傾向が見られる項目（項目番号：30、31）、④小学校を利用する父親は支持し、保育園を利用する父親は不支持の傾向が見られる項目（項目番号：8、13）、⑤保育園および小学校を利用する父親がともに不支持の傾向が見られるが、保育園を利用する父親が有意に不支持の項目（項目番号：7、18）、⑥保育園および小学校を利用する父親がともに不支持の傾向が見られるが、小学校を利用する父親が有意に不支持の項目（項目番号：38）の6つに分類された。このう

ち、保育園を利用する父親と小学校を利用している父親で、反対の傾向が見られた項目について見てみると、保育園の父親が支持傾向で、小学校の父親が不支持傾向のものは、「30、家で仕事はしない」、「31、子どもがいると自分のやりたいことが十分にできない」であり、逆に保育園の父親が不支持傾向で、小学校の父親が支持傾向のものは、「8、家族でよく旅行に出かかける」、「「13、仕事を通して社会的

表－1　項目別平均値とその差の検討結果

項目番号	内容	全体	保育園	小学校	有意確率	
1	子どもと一緒にいると癒される。	4.33	4.28	4.35	0.485	
2	休日は自分の趣味に没頭している。	2.28	2.36	2.24	0.373	
3*)	生活よりも仕事を優先している。	2.98	3.11	2.93	0.203	
4	子どもと一緒にいるときが一番幸せである。	4.25	4.19	4.28	0.372	
5	仕事をするのは安定した生活のためである。	3.99	4.21	3.90	0.024	*
6	子育ては楽しい。	3.97	3.85	4.02	0.102	
7	仕事をするのは自分のキャリアのためである。	2.76	2.38	2.91	0.001	**
8	家族で旅行によく行っている。	3.27	2.93	3.40	0.003	**
9	仕事をしているとストレスが溜まりやすい。	3.23	3.11	3.28	0.284	
10	充実感をもって仕事を行なっている。	3.61	3.53	3.64	0.377	
11	定時には帰宅するようにしている。	2.69	2.84	2.63	0.258	
12	家事はすべて妻に任せている。	3.38	3.27	3.43	0.351	
13	仕事を通して社会的地位を得たい。	3.04	2.28	3.13	0.047	*
14	家族と過ごす時間がもっとほしい。	3.97	3.84	4.03	0.099	*
15	仕事は自分自身の成長につながっている。	3.86	3.84	3.88	0.740	
16	家族は自分の仕事について理解している。	3.85	3.76	3.89	0.309	
17	休日は子どもと一緒に過ごしている。	3.91	3.88	3.93	0.711	
18	仕事をしているときが一番楽しい。	2.49	2.16	2.62	0.001	**
19	職場は子育てについて理解している。	3.35	3.30	3.38	0.558	
20	子育ては夫婦で協力して行うものである。	4.28	4.43	4.21	0.052	*
21	仕事よりも家族が大切である。	4.11	4.31	4.03	0.017	*
22	家にいるときは子どもと多く接している。	4.03	3.96	4.06	0.416	
23	仕事とは、家族を経済的に支えるためのものである。	4.04	4.07	4.03	0.760	
24	子どもの成長に喜びを感じる。	4.57	4.64	4.55	0.295	
25	家事は夫婦で協力して行っている。	3.29	3.38	3.25	0.448	
26	仕事を通じて自分の能力を発揮できている。	3.69	3.58	3.74	0.201	
27	自分の子どもに誇りを持っている。	4.38	4.35	4.39	0.687	
28	育児休暇をとったことがある。／あるいはとっている	1.77	1.62	1.84	0.212	
29	子育てによって自分も成長している。	4.09	4.00	4.12	0.288	
30	家では仕事はしない。	3.13	3.78	2.87	0.000	***
31	子どもがいると自分のやりたいことが十分にできない	3.02	3.45	2.85	0.000	***
32	家族との団らんを大切にしている。	3.99	3.93	4.01	0.489	
33	仕事で頑張れるのは子どもがいるからだ。	4.11	4.09	4.12	0.857	
34	子どものために仕事を休める。	3.77	3.76	3.77	0.926	
35	子どもから解放されたい。	1.85	1.85	1.85	0.982	
36	子育てに積極的に参加している。	3.63	3.58	3.66	0.550	
37	子ども中心の生活にしている。	3.62	3.68	3.60	0.562	
38*)	家にいると精神的に疲れる。	2.12	2.30	2.05	0.082	*
39*)	子育ては妻の仕事である。	2.18	2.12	2.20	0.607	
40	休日は家でのんびりしている。	3.02	2.91	3.06	0.271	

*) 反転項目

(注)表中の*、**、***はそれぞれP＜.1、P＜.01、P＜.001の有意性を示す。

表-２ 項目別平均値の大きい項目／小さい項目

	項目番号	内容	平均値
平均値が4以上	1	子どもと一緒にいると癒される。	4.28
	4	子どもと一緒にいるときが一番幸せである。	4.28
	20	子育ては夫婦で協力して行うものである。	4.28
	21	仕事よりも家族が大切である。	4.11
	22	家にいるときは子どもと多く接している。	4.03
	23	仕事とは、家族を経済的に支えるためのものである。	4.04
	24	子どもの成長に喜びを感じる。	4.57
	27	自分の子どもに誇りを持っている。	4.38
	29	子育てによって自分も成長している。	4.09
	33	仕事で頑張れるのは子どもがいるからだ。	4.11
2未満	28	育児休暇をとったことがある。／あるいはとっている。	1.77
	35	子どもから解放されたい。	1.85

表 - 3　保育園と小学校で有意差の見られた項目の分類

①保育園および小学校を利用する父親がともに支持する傾向が見られるが、保育園を利用する父親が有意に支持する項目（3項目）

5，仕事をするのは安定した生活のためである。
20，子育ては夫婦で協力して行うものである。
21，仕事よりも家庭が大切である。

②保育園および小学校を利用する父親がともに支持する傾向が見られるが、小学校を利用する父親が有意に支持する項目（1項目）

14，家族と過ごす時間がもっとほしい。

③保育園を利用する父親は支持しているが、小学校を利用する父親は不支持の項目（2項目）

30，家では仕事はしない。
31，子どもがいると自分のやりたいことが十分にできない。

④小学校を利用する父親は支持しているが、保育園を利用する父親は不支持の項目（2項目）

8，家族で旅行によく行っている。
13，仕事を通して社会的地位を得たい。

⑤保育園および小学校を利用する父親がともに不支持傾向が見られるが、保育園を利用する父親が有意に不支持の傾向が見られる項目（2項目）

7，仕事をするのは自分のキャリアのためである。
18，仕事をしているときが一番楽しい。

⑥保育園および小学校を利用する父親がともに不支持の傾向が見られるが、小学校を利用する父親が有意に不支持の項目が見られる項目（1項目）

38，家にいると精神的に疲れる。

地位を得たい」であった。この事から、子どもの年齢が小さいほど、子どもに手のかかることが父親の仕事や生活全般に影響しており、父親が仕事や自分のやりたいことを十分に行うことができない状況にあることが示された。

2、父親のWLB観に対する意識に関する40項目の構造

父親のWLB観に対する意識に対する回答について、因子分析（主成分解・バリマックス法）を行なった。固有値の減衰状況と解釈可能性を考慮し、4因子構造を採用した上で、共通性が極端に低い10項目を除いて、再び因子分析（主成分解・バリマックス法）を行なった。バリマックス回転後、得られた４因子に対して.400以上の負荷量の絶対値が複数の因子に現れた１項目については判別力が乏しいと考えられることから分析から除外し、残った 29 項目を分析対象として採用した。父親の WLB 観に対する意識に関する 29 項目の因子分析の結果を【表-4】に示す。第Ⅰ因子は、「1，子どもと一緒にいる

と癒される」、「4，子どもと一緒にいる時が一番幸せである」、「24，子どもの成長に喜びを感じる」など、子どもの存在を肯定し、自分にとって仕事や生活をする上でかけがえのない存在と捉える 12 項目であると考えられる。従って〈子ども・家庭中心〉因子と命名した。第Ⅱ因子は、「7，仕事をするのは自分のキャリアのためである」、「15，仕事は自分自身の成長につながっている」、「18，仕事をしているときが一番楽しい」など、仕事は自己実現の場であり、自分を高めてくれるものであるといった、仕事を肯定する意識の捉え方に関する 7 項目であると考えられる。従って〈仕事中心〉因子と命名した。第Ⅲ因子は、「19，職場は子育てについて理解している」、「28，育児休暇をとったことがある／あるいはとっている」、「36，子育てに積極的に参加している」など、子育てを積極的にやっていこうとする意識の捉え方に関する 7 項目であると考えられる。従って〈子育て中心〉因子と命名した。第Ⅳ因子は、「5，仕事をするのは安定した生活をするためである」、「9, 仕事をしているとストレスが溜まりやすい。」、「23, 仕事とは、祖族を経済的に支えるためのものである。」など、仕事は、家族や生活のためにおこなうものであるといった捉え方に関する 3 項目であると考えられる。従って〈仕事は義務〉因子と命名した。これら 4 因子のα係数は、第Ⅰ因子〈子ども・家庭中心〉は.748、第Ⅱ因子〈仕事中心〉は.764、第Ⅲ因子〈子育て中心〉は.649、第Ⅳ因子〈仕事は義務〉は.411 となった。第Ⅲにおいてはやや低い値であり、Ⅳ因子においては低い値ではあるが、項目数を考慮すると、ある程度の信頼性が得られた結果であり、内的整合性は認められたものと判断した。

3、抽出された4因子の尺度別平均値の比較

父親の WLB 観に対する意識に関する項目の得点を因子ごとに合計し、その合計値を各々の因子に含まれる項目数で割ることによって、個人の尺度別平均値を求めた。【表-5】にその結果と分散分析の結果を示す。父親の WLB 観に対する意識に関する項目は、「とてもあてはまる（＝5 点）」から「全くあてはまらない（＝1 点）」の 5 件方による評定を行なっているので、3 よりも項目別平均値が大きいほどその項目は支持され、3 より小さいほどその項目は不支持であるということが示されていると考えられる。父親全体の尺度別平均値を見てみると、因子Ⅰ＜子ども・家庭中心＞と因子Ⅲ＜仕事は義務＞で支持傾向がみられ、因子Ⅱ＜仕事中心＞と因子Ⅲ＜子育て中心＞については、支持でも不支持でもない中立的な結果となっていることが示された。また、保育所を利用する父親と小学校を利用する父親の平均値の分散分析の結果より、因子Ⅱ〈仕事中心〉の尺度別平均値に有意差があることが明らかとなり、小学校の父親のほうが、自分の生活の中で仕事に重心を置くことに対して有意に支持傾向があることが示された。

【考察】

1、父親のWLB観

父親のWLB観に関する質問紙調査結果を因子分析することにより、4因子を抽出した。そして、それらを因子Ⅰ〈子ども・家庭中心〉、因子Ⅱ〈仕事中心〉、因子Ⅲ〈子育て中心〉、因子Ⅳ〈仕事は義務〉と命名した【表-5】。また、尺度別平均値の結果により、因子Ⅰ〈子ども・家庭中心〉と因子Ⅳ〈仕事は義務〉の２つの因子は、それぞれ3.98、3.78で父親に支持されている傾向があることが示された。その一方で、因子Ⅱ〈仕事中心〉と因子Ⅲ〈子育て中心〉は、それぞれ3.32、3.15であり、支持でもなく不支持でもない、中立的な傾向が見られることが明らかとなった。また、項目別平均値の結果において、支持傾向の強い項目と弱い項目から【表－2】、父親にとって子どもが極めて重要な存在となっていることが示されている一方で、育児休暇は取ってはいない（取れていない）ことが示されている。

以上のことから、父親の仕事と生活の全般において、子どもの存在は父親にとって極めて重要であり、子どもを意識の中心においている傾向が見られることが明らかとなった。その一方で、仕事に対しては、それを生活していくための義務的なものとしてとらえる傾向がみられ、決して仕事を意識の中心においているわけではないことも示された。しかしながら、子どもを意識の中心において生活している割には、子育てについては、それに積極的に参加したり、子どものためにあえて時間を作ったり、あるいは仕事を休んだりといった意識は低いことも示されている。これらのことは、望月ら（2006年）、佐藤（2011年）が示すような長時間労働を強いられている父親が、義務的に仕事を行い、子どものために十分な時

表-4　父親の WLB 観に対する意識に関する項目（29 項目）の構造

項　目	因子			
	1	2	3	4
4, 子どもと一緒にいるときが一番幸せである。	**0.776**	0.022	-0.035	-0.087
1, 子どもと一緒にいると癒される。	**0.739**	0.089	-0.043	-0.170
24, 子どもの成長に喜びを感じる。	**0.686**	0.089	0.111	0.084
32, 家族との団らんを大切にしている。	**0.676**	0.116	0.254	0.173
27, 自分の子どもに誇りを持っている。	**0.659**	0.155	0.114	0.030
33, 仕事で頑張れるのは子どもがいるからだ。	**0.657**	0.091	0.060	0.226
6, 子育ては楽しい。	**0.647**	0.237	0.056	-0.145
38, 家にいると精神的に疲れる。	**-0.590**	0.036	0.024	0.314
29, 子育てによって自分も成長している。	**0.570**	0.283	0.339	0.042
21, 仕事よりも家族が大切である。	**0.519**	-0.204	0.281	0.288
14, 家族と過ごす時間がもっとほしい。	**0.486**	0.149	-0.181	0.356
39, 子育ては妻の仕事である。	**-0.474**	0.115	-0.093	-0.101
10, 充実感をもって仕事を行なっている。	0.053	**0.733**	0.117	-0.124
26, 仕事を通じて自分の能力を発揮できている。	0.079	**0.679**	0.091	-0.019
15, 仕事は自分自身の成長につながっている。	0.197	**0.665**	-0.010	0.036
18, 仕事をしているときが一番楽しい。	-0.269	**0.656**	0.113	-0.229
13, 仕事を通して社会的地位を得たい。	0.128	**0.638**	-0.281	0.084
7, 仕事をするのは自分のキャリアのためである。	0.079	**0.596**	-0.160	0.184
16, 家族は自分の仕事について理解している。	0.285	**0.427**	0.289	0.048
36, 子育てに積極的に参加している。	0.392	0.138	**0.628**	0.061
11, 定時には帰宅するようにしている。	-0.025	-0.068	**0.607**	0.012
19, 職場は子育てについて理解している。	-0.078	0.370	**0.553**	-0.089
34, 子どものために仕事を休める。	0.186	-0.043	**0.549**	0.131
37, 子ども中心の生活にしている。	0.340	-0.133	**0.507**	0.128
3, 生活よりも仕事を優先している。	-0.130	0.190	**-0.465**	0.238
28, 育児休暇をとったことがある。／あるいはとっている。	-0.047	0.079	**0.431**	0.090
5, 仕事をするのは安定した生活のためである。	0.023	-0.008	0.112	**0.714**
23, 仕事とは、家族を経済的に支えるためのものである。	0.081	0.036	0.124	**0.607**
9, 仕事をしているとストレスが溜まりやすい。	0.116	-0.239	-0.326	**0.469**
因子寄与	5.447	3.373	2.728	1.975
因子寄与率	18.156	11.243	9.092	6.583
累積寄与率	18.156	29.399	38.491	45.074
Cronbach's α	0.748	0.764	0.649	0.411

表-5　4 因子の尺度別平均値の差の検討

項　目	全体	保育園	小学校	有意確率	
因子Ⅰ〈子ども・家庭中心〉	3.98	3.94	4.00	0.271	
因子Ⅱ〈仕事中心〉	3.32	3.15	3.39	0.006	**
因子Ⅲ〈子育て中心〉	3.15	3.09	3.17	0.353	
因子Ⅳ〈仕事は義務〉	3.78	3.79	3.77	0.870	

（注）表中の**は、p＜.01の有意性を表す。

間を割くこともできない中で、その子どもの存在を心のよりどころとしているような現状を反映しているとも考えられ、仕事に対しても、やりがいや充実感を十分に感じることができず、家庭生活においても子育てなどに十分に意識が回らない父親の、WLBの理念とはかなり乖離した現状を示唆しているとも考えられる。ここで、特に＜子育て中心＞の尺度別平均値が、他の3因子との比較でも最も小さくなっ

ていることは、共働き家庭のような母親も父親と同様に働いている家庭においても、母親に対する子育てや家事の負担が大きくなっていることを示すものである。それは、日々の家事・育児ということだけではなく、例えば、子どもが病気になった時にどちらが仕事の休みを取るかといったことまでも含めて、母親の負担が大きくなっているということである。そのような状況の中でも、父親が家事・育児に対する負担を負うことが十分にできない要因としては、仕事に対する義務感・負担感が大きいといったことも背景にあるように思われる。仕事に対して義務感や負担感以上にやりがいや充実感を感じることができれば、それだけ父親自身が仕事に対して感じている義務感・負担感は軽減されることになり、その分家事・育児といった生活面における負担感を負うことができるようになってくるものと考えられる。長時間労働の問題も含めて、父親の労働の質について検討していくことが、父親のWLBを考えていく上において重要なことであると考えられる。

2、保育園及び小学校を利用する父親のWLB間に対する意識の比較

保育園を利用する父親と小学校を利用する父親の尺度別平均値の分散分析の結果より、因子Ⅱ〈仕事中心〉に有意差が見られた。保育園の父親と小学校の父親の相違は、子どもの年齢であることから、この有意差は、子どもが乳幼児か児童かに起因する差であるとも考えられる。従って、因子Ⅰ〈子ども・家庭中心〉、因子Ⅲ〈子育て中心〉、因子Ⅳ〈仕事は義務〉他の3因子については、子どもの年齢に関係なく子育て中の父親に共通する傾向と捉えることができるが、因子Ⅱ〈仕事中心〉の有意差は子どもの年齢に起因するものであると考えられる。つまり、子どもの年齢が上がり、子どもに手がかからなくなった分、父親の意識が仕事に向くようになっていることが示唆される。

また、保育園を利用する父親と小学校を利用する父親の項目別平均値の分散分析の結果【表－1】より、保育園の父親の方が、小学校に比較して有意に支持する項目は、「5、仕事をするのは安定した生活のため」、「20、子育ては夫婦で協力して行うものである」、「21、仕事よりも家庭が大切である」、「30、家では仕事はしない」、「31、子どもがいると自分のやりたいことが十分にできない」であり、逆に小学校の父親が有意に支持する項目は、「14、家族と過ごす時間がもっとほしい」、「8、家族で旅行によく行っている」、「13、仕事を通して社会的地位を得たい」である。つまり、保育園の父親は、子どもの年齢が小さく、まだまだ子どもに手がかかることから、子どもや家庭は大切であると意識はしているものの、仕事や生活全般に小学校の父親以上に余裕が無いことが示されていると考えられる。一方、小学校の父親は、子どもの年齢が上がるにつれて、保育園の父親に比べて、仕事や生活全般に若干余裕が生まれてきており、仕事も義務的から社会的地位を得るためといった捉え方や、家族と旅行をするなど余暇を楽しもうとする意識が強まってきていると考えられる。

以上のことから、保育園の父親も小学校の父親も、子どもを意識の中心においており、その一方で、仕事に対しては、それを義務的なものとしてとらえる傾向があること。子どもを意識の中心においている割には、子育てに対する意識が低いことは共通しているが、子どもの年齢が上がり、子どもに手がかからなくなってくる小学校の父親のほうが、仕事への意識は高まっていることが明らかとなった。ここで、因子Ⅲ〈子育て中心〉について考えてみると、保育園の父親は、例えば、「20、子育ては夫婦で協力して行うものである」で小学校の父親よりも有意に強く支持する傾向が見られるなど、子どもの年齢が小さく手もかかることから、子育ては母親だけが行うものではなくことがより意識されているにもかかわらず、因子Ⅲ〈子育て中心〉に対しては、保育園の父親と小学校の父親間で有意差は無く、共に支持でも不支持でもないという結果が示されている。また、小学校の父親では、例えば、因子Ⅱ〈仕事中心〉の意識は高まってきており、「8、家族で旅行によく行っている」の支持が有意に高いなど、仕事や生活の余暇などに対する意識が高まっているにもかかわらず、因子Ⅲ〈子育て中心〉は、先にも述べたように保育園の父親と小学校の父親間で有意差は無く、共に支持でも不支持でもないという結果となっている。つまり、子どもに手がかかると感じているときも、少し仕事や生活に余裕が感じられるようになったときも、子育てに積極的に参加していくという意識は高まっていないことが示されている。従って、この家事・子育てに関する父親の意識や捉え方は、そのものを変えていく必要があるようにも思われる。

以上のことから、父親のWLBについては、長時間労働の問題も含めた父親の労働のあり方の質と、家事や育児への積極的な参加に対する父親自身の意識改革の2点が重要であると考えられ、それらのことによって、父親の仕事と生活の調和（WLB）の実現が可能となるものと考えられる

【参考文献】

池田心豪．（2010）．ワーク・ライフ・バランスに関する社会学的研究とその課題--仕事と家庭生活の両立に関する研究に着目して．労働政策研究・研修機構．日本労働研究雑誌，52（6）pp20－31

桐野匡史．朴志先．近藤理恵他．（2011）．共働き世帯の父親の育児参加と母親の心理的well-beingの関係．厚生労働統計協会．厚生の指標，58（3）pp1－8

佐々木卓代．（2012）．男性の育児意識と育児参加．へるす出版．小児看護，35（10）pp1299－1304

佐藤淑子．（2011）．ワーク・ライフ・バランスと乳幼児を持つ夫婦の育児の協同―日本の中の多様性―．鎌倉女子大学／鎌倉女子大学紀要編集委員．鎌倉女子大学紀要，（18） pp15－26

田中結花子．（2009）．「父親の子育て意識と子育て支援」―父親の子育てサークル参加が家族に与える影響の実態調査からの考察―．緒方医学化学研究所医学生物学速報会．医学と生物学，153(8) pp292－301

田中結花子．青石恵子．石井英子．（2009）．父親の子育て意識と子育て支援父親の子育て支援サークルに参加している父親の子育て意識・育児観に及ぼす影響--インタビュー調査による分析を中心に．緒方医学化学研究所医学生物学速報会．医学と生物学，153（9）pp369－377

中央調査社．（2012. 9）．父親の育児参加に関する世論調査．（http://www.crs.or.jp/backno/No659/6592.htm）. 2012. 10. 2取得

内閣府．（2012. 3）．仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の実現に影響を与える生活環境に関する意識調査．（http://wwwa.cao.go.jp/wlb/research/pdf/wlb-net-svy-no4.pdf）. 2012. 10. 2取得

中里英樹．（2011）．『ワーク・ライフ・バランス』を超えて―仕事と生活の統合モデルから見る子育て．甲南大学人間科学研究所．心の危機と臨床の知，12 pp33－43

樋貝繁香．遠藤俊子．（2008）．生後１ヶ月の子どもをもつ父親の仕事満足度に関する研究．山梨県母性衛生学会．山梨県母性衛生学会誌，７ pp59－68

松田茂樹．（2005）．育児期の共働き夫婦のワーク・ライフ・バランス．第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部. Life design report,（168）

望月彰．神田直子．戸田有一（他）．（2006）．日本の子育て実態と子育て支援の課題(5)村山科研「保育・子育て全国3万人調査」の概要第3章父親の生活と意識第1節父親の家庭生活と労働の実態 ．全国保育団体連絡会．保育情報／保育研究所編，(356)

望月彰．神田直子．戸田有一．日本の子育て実態と子育て支援の課題(7)村山科研「保育・子育て全国3万人調査」の概要　第3章父親の生活と意識第3節父親の望む子育て支援 ．全国保育団体連絡会．保育情報，（358） pp39－44

茂手木明美．浅川和美．前橋明．（2003）．仕事と子育ての両立支援に関する研究―（1）幼児期の子どもをもつ父親と母親の意識―．日本幼少児健康教育学会．幼少児健康教育研究，11（2） pp80－87

大和佐智子．（2008）．調査データから「新入社員意識調査」から見た新入社員の仕事観～新入社員と管理職の常識ギャップにメスを入れよ．日本経済新聞社．日経広告手帖，52（9） pp4－7

吉澤康代．（2011）. 13社5000人調査で見えた仕事観・キャリア観の現実．リクルートワークス研究所. Works，17（2）pp8－13

【謝辞】

本研究は平澤の収集した質問紙調査データを平澤と齋藤が再分析し、その分析データを平澤と齋藤で検討した結果をまとめたものである。本研究を行うにあたり、質問紙調査にご協力くださいました保育園の園長先生、小学校の校長先生をはじめとする職員、保護者の皆様に心から感謝申し上げます。